



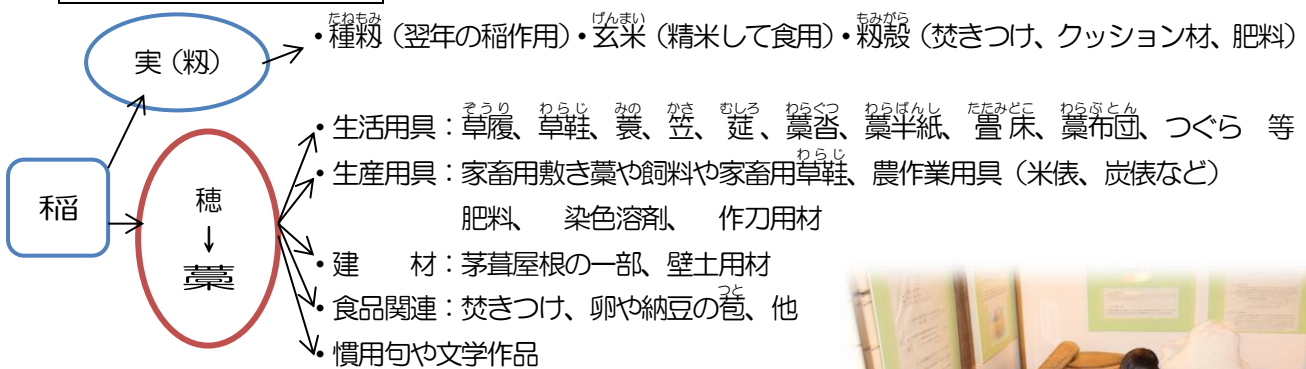
10月末から11月初旬にかけては小春日和が続いて、空が高く見えた日もありました。11月3日の市制施行60周年記念式典の日も好天に恵まれ、総合公園の銀杏の葉が青空に金色に映えていました。

様々な藁の利用 レイクタウンエコウィーク2018 ミニ企画展

10月20日(土)、21日(日)にレイクタウン周辺で開催された「レイクタウンエコウィーク2018」で、旧東方村中村家住宅では藁がどのように使われてきたかについての企画展を行いました。

産業の発達により、現代では便利な生活ができるようになりましたが他方では生態系の破壊や環境問題も起きています。そこで今回の企画展では資源の再利用や再生利用を考える一端として、古民家が実際に使われていた頃の藁に着目して展示しました。展示品には市立弥栄小学校や八潮市立資料館のご協力もいただきました。

藁の使われ方



草履と草鞋の構造や機能の違いを紹介しました。



小さいお子さんも熱心に。



藁沓 (市立弥栄小学校所蔵)

飯櫃用つぐら (八潮市立資料館所蔵)

納豆の菘
藁の納豆菌を利用して作りました。

凍み豆腐を下げる時に、このようにしました。



卵の菘
小売店等ではこのようにして販売しました。

古民家での
お茶会

ほっこりしました

エコヴィークの初日、旧東方村中村家住宅ではお茶会も開かれました。日中は穏やかな日和でしたので、散策の途中で寄ってくださった方もおられ、76名の参加をいただきました。ご感想を一部ご紹介しましょう。

- ★小さな子も快く受け入れてもらい、有難かった。
- ★初めて来館し、立派な住居も見せていただいた。
- ★普段正座しないからこそ、正座のお茶会でもよいのでは。
- ★腰が痛いので椅子で大変良かった。
- ★秋の一日、素敵な体験ができた。

ご協力、ありがとうございました。



なぜ

大戸口の敷居はまたがなければいけない？

小学3年生の疑問です。今年度も古民家での見学・体験活動が始まり、市立川柳小学校と千間台小学校の皆さんが訪れました。この疑問にはっとさせられました。

夏、市内小中学校の新採用の先生方が研修で大間野町中村家住宅を来館した際に何うと、学校では敷居を“レール”と呼ぶことが多いそうです。「レールを掃除する」というように。

古民家の土間に入る入り口を「大戸口」といいます。重い屋根を支える柱と大戸を支えるために、ここの敷居は太くて頑丈です。「古民家」と言われるものが建てられた当時には「孫子の代まで」、つまり100年以上使えるように考えて様々工夫して建てられました。敷居は日常的に頻繁に出入りする場所で傷みやすいので、大切に使うということが第一だったでしょう。

けれどもそれだけではなかったと思います。「二度とうちの敷居をまたぐな」とか「実家の敷居が高くて帰りにくい」という言葉があるように、敷居は意識の面でも内と外を分ける境目、けじめとして、現代よりも強く意識されたのではないのでしょうか。また大戸口は土間に入ると直ぐ前に大黒柱があることが多く、一家を支えるものの一つと解されたかもしれません。地域によっては「大戸口の敷居は親父の頭」などと言うこともあるようです。

子どもたちは「バリアフリーじゃないんだ」と言うこともあります。確かに戸口の敷居は太くて高く、土間から板の間への上り 框 も高いので、障がいのある方や高齢の方にとっては難儀でもあるでしょう。これは湿度が高い日本の風土とも関係があると思われます。

「敷居」は古民家が少なくなるのに伴って死語になっていくのでしょうか。まさか「二度とうちのレールをまたぐな」とは言わないと思いますが、家族の在り方の変化に伴って家の部材名称も変わってきているようです。

それにしても敷居に注目した小学生。9歳とは思えないほどの観察力です。この観察力は疑問と想像力を生み出します。それを追及していくと、や

がては古民家で実生活を送っていた人々の考え方（さらには生き方）に触れられるようになるでしょう。今は答えが見えなくても、成長するに従ってある時何かと繋がってくることもあります。そうなったら、中村家住宅はその人の中で生きることになりますね。

次回以降、各小学校の見学・体験の様子を紹介していきます。

旧東方村中村家住宅の大戸口



敷居

唐箕での脱穀体験



太い梁組みの様子
を見学

